

何のために書くのか

山田 七絵

〔中国農村研究〕

研究者には小説を愛好する人と全く読まない人の二種類がいる、とある編集者に聞いたことがある。確かに小説を読まなくても論文は書ける。だが、優れた文学作品からは鋭い観察力や表現力を学ぶことができないだけでなく、異文化を理解するための入り口となることもある。書き手自身も地域の歴史的な文脈のなかに生きており、表現の自由を制約されていることも往々にしてある。それでもなお書かねばならなかった理由は何か。読むたびにそんなことを考えてしまうのが、この三冊である。

●書くことへの執念

中学時代、少し大人びたクラスメートが貸してくれたのがハンガリー出身の作家アゴタ・クリストフ著『悪童日記』（堀茂樹訳、早川書房、一九九一年）である。主

人公の双子の少年は、戦時下の爆撃と食料難を逃れて「大きな町」から「小さな町」の祖母の家へ疎開する。祖母は夫殺しの噂を持つ「魔女」と呼ばれる老女で、吝嗇で不潔で残酷である。聡明な双子は祖母の家で生きるために労働を覚え、自らに様々な訓練を課し、聖書で読み書きを学ぶ。そして過酷な世界で生き抜くための技術——盗み、恐喝、ついには殺しまで——を次々に習得していく。

本書の特徴のひとつに独特の表現形式がある。原題（Le Grand Cahier、仏語で「大きなノート」）のとおり、本書は双子が作文の練習のために書き記したノートという形式をとっている。双子は一切の主観的な表現を排し、事実のみを記すことを決める。双子の日常には聖職者、外国人将校、脱走兵、障害者などが登場し、戦争で荒み

きった世界であらゆる種類の暴力が横行する。双子は周囲で起こる事件を冷静に観察し、人々の本質を見抜き、記録する。無機質な文章によって物語は淡々と進行するが、それがえもいわれぬ不気味さを醸し出している。

クリストフの人生は東欧の近現代史と重なる。本書には具体的な地名、年代はおろか人名すら登場しないが、舞台は第二次世界大戦中のハンガリー、「大きな町」はブダペスト、「小さな町」は彼女が戦争末期に幼少時を過ごした（当時ドイツ領だった）オーストリア国境に近い町である。終戦後ドイツから解放されたハンガリーは皮肉にももうひとつの全体主義、ソ連の社会主義体制に組み込まれる。クリストフは一九五六年のハンガリー動乱時に乳飲み子を抱えてスイスに亡命、工場で働きなが

ら習得した仏語で本書を著した（独特の表現形式は非母語で執筆したことによる）。本書は一九八六年にフランスで出版されるや反響を呼び、各国で翻訳された。

作家としての成功にもかかわらず、彼女は自伝『文盲』のなかで亡命によって手に入れた経済的な豊かさや安全の代償、すなわち難民としての孤独と望郷の念、母語で表現することへの渴望、非母語が自分のなかの母語を侵食していく恐怖について語る。「確かだと思うこと、それはどこにいうと、どんな言語であろうと、わたしはものを書いただろうということだ（同書六七ページ）」という一文からは、彼女の書くことへの並ならぬ執念が伝わってくる。続編『ふたりの証拠』『第三の嘘』も併せて読むことをお勧めする。

●痛快な自虐ユーモア

中国研究を始めた頃、私は研究書を読む傍ら莫言、余華、朱曉平などの小説を手当たり次第に読んで、後年中国各地を訪れ直接現地の人々と触れ合うようになると、毛沢東時代はせいぜい三、四〇年前のことであり、現在の中国社会に依然大きな痕跡を残しているこ

とにしばしば気づかされた。

文化大革命から改革開放期を題材にした傑作はごまんとあるが、大部ながら一氣に読んでしまったのが余華著『兄弟』(上・下)(京鹿訳、文藝春秋、二〇〇八年)

である。本書は文革編と改革開放編からなり、上巻は徹底した悲劇、下巻は徹底した喜劇として描かれる。文革編は涙なしには読めない家族愛の物語である。主人公の李光頭と宋鋼は親同士の再婚により兄弟となる。兄の宋鋼は礼儀正しく温厚、弟の李光頭は粗暴で下品だが利に聡い。容貌ものに「三蔵法師と猪八戒」と噂されるほど対照的だが、二人は強い絆で結びつき、文革の混乱と貧困のなかで互いに支え合って生きていく。父が紅衛兵のリンチにより壮絶な死を遂げ、数年後母も病死すると、二人はこの世で唯一の肉親となる。

改革開放編では抑圧された文革期から一転、皆が金もうけに走る軽薄な欲望の時代が描かれる。兄弟は町一番の美女をめぐって袂を分かち、別々の道を歩んでいく。李光頭は持ち前の図々しさと商才を開花させ、貧しい孤児から億万長者に成り上がる。一方宋鋼は国营企業が倒産し、体を壊し、果て

は詐欺師にそそのかされていかかわしい豊胸クリームの行商人にまで凋落してしまう。市場経済の勝者となった弟は文革期に憧れていたもの——豪邸、高級車、美女——を全て手に入れるが、兄の死によつて一番大切なものが何だったかを思い知る。一見荒唐無稽な物語のなかに、中国人の直面する不安感、虚無感が描き出されている。

余華は一九六〇年生まれで文革期に青春時代を過ごしている。一貫して時代の波に翻弄される庶民を描き、中国で最もノーベル賞に近い作家の一人とされる。本書は国内で爆発的なヒット作となったが、内容の過激さ(下品さ?)ゆえに文壇からは酷評された。確かに余華らしい文章のテンポの良さはそのままで(翻訳も良い)文体は(意図的に)粗野で猥雑で、善良な宋鋼が落ちぶれる結末には救いがない。作者はあとがきで「長い間ずっと、こんな作品を書きたいと考えていました。極端な悲劇と極端な喜劇が一緒になった作品を。(中略)この四〇年あまり、我々の生活はまさに極端から極端へと向かうものだったからです」と語る。本書は人々の変わり身の早さ、したたかさを自虐

的ユーモアで愛をこめて描くと同時に、現代中国社会を痛烈に皮肉っている。自分たち自身を笑い飛ばす、大らかで強靱なユーモア精神に圧倒される。

●ときには子供のように

子供は正直だ。大人になるにつれ人は自分の考えを隠し、物分りの良いふりをするに慣れる。しかし、創作に関わる者は「王様は裸だ」と叫んだ子供のように真実に正直でなければならぬ。大城立裕著『カクテル・パーティー』(理論社、一九八二年)を読んだ時、そんなことを思った。

本書は米軍統治下の沖縄を舞台に沖縄とアメリカ、中国、日本の関係を重層的に描いている。主人公の上原は沖縄在住のアメリカ人ミラー、本土の新聞記者小川、中国人弁護士の子孫の四人で中国語学習グループを作っており、ミラーに米軍基地内のカクテル・パーティーに招かれる。その夜上原の娘が米兵の暴行を受け、抵抗して米兵を崖から突き落とし負傷させてしまう。米兵は娘を告訴するが、圧倒的にアメリカ人に有利な法律を前に上原は米兵の告訴を躊躇する。上原が三人の友人に助けを求め

た時、親善の名のもとに隠されてきた各々の立場が浮かび上がる。ミラーは事件が支配者と被支配者の対立へと発展することを恐れ、突如冷淡な態度に転じる。孫は沖縄とアメリカの関係を日本による

自国の侵略の歴史と重ね合わせ、上原も戦時下の中国で自分自身も加害者であったことを認識する。最終的に上原は大義名分のもので個人の怨恨を覆い隠す親善は虚妄であり、いちどお互いに絶対的に不寛容になるべきだという結論に達する。そしてカクテル・パーティーに象徴される国際親善の欺瞞と対決するため、不利と知りつつも米兵を告訴することを決意する。

大城は一九六七年本書で沖縄出身者として初の芥川賞を受賞した。本書は今日の沖縄の基地問題、日本とアジア諸国の関係に対して示唆的である。作者は現在も創作活動を続けており、本書は戯曲化され二〇一一年にハワイで上演された。真の友好は、結局本音をぶつけ合いながら相手を理解しようとする努力によつてしか生まれない。我々は隣国に対して決して無知・無関心であってはならない。(やまだ ななえ/アジア経済研究所 環境・資源研究グループ)